平成6年5月9日

豊島区という地域に関わりながら、
女性たちの生き方に深く影響をもたらした
１４人の女性たちの足跡を追う

『風の交叉点 ~豊島に生きた女性たち~』第３集

区役所情報公開コーナー、エポック10、区内書店で発売中

歴史の裏方のさらに裏方に位置づけられてしまった無名の女性たちの声や姿からさまざまな生き様を学び、分かち合うとともに次代にそれらを伝えることを目的に、平成４年第１集が出版された『風の交叉点～豊島に生きた女性たち～』の第３集がこのほど刊行され、区の情報公開コーナー（東池袋１－１８・区分庁舎Ａ館１階）、エポック１０（池袋西口メトロポリタンプラザビル１０階）、区内の書店で発売されている。豊島区立男女平等推進センター「エポック１０」編。発行ドメス出版。定価は１５４５円（消費税含む）。なお情報公開コーナー、エポック１０では消費税分を除く１５００円で販売。発行部数は１５００部。

本書は、昭和６３年に策定された豊島区婦人行動計画『としま１５０プラン』でうたわれている『女性史の編さん事業』として、平成４年から毎年出版され、今回で第３集目となった。

『職業を通して』『まちに生きる』『家族とともに』としてまとめ、自らの意志と自己犠牲のもと、女性蔑視の時代を精一杯生きてきた２６人の女性の目を通して、構造的女性差別の全体像に迫った第１集。『ハイカラさんと旧家』『働き抜いて』『手をたずさえて』『戦争は二度といや』としてまとめ、大正デモクラシーから第二次世界大戦、戦後の混乱、高度経済成長と社会が激しく変化していく中で生き続けてきた８９人の女性の生き様を克明に紹介した第２集。そして、『この地を舞台に◆家庭から地域へ』、『愛を基本に◆社会事業に生きる』、『あふれる思いを◆生涯を女子教育に』の３章で構成し、前２集とやや趣を変えて、豊島区という地域に根ざし、女性参政権獲得運動、社会事業、女子教育の実践と、女性解放に一生を捧げ、苦しみながらも社会的に評価を受け、人間の名に値しない扱いしか受けられなかった女性に勇気と希望を与えた１４人の女性たちを、彼女たちが地域の人々からどのように受け止められていたのかを、克明にひろう努力をした本書。いずれも豊島区の呼びかけに応じた女性史編さん員が、手塩にかけて編集したものである。

第１章『この地を舞台に◆家庭から地域へ』では、１９６０年代以降家庭の中で過ごすことのみを潔しとせず、家庭から地域に自己の生き方を広げ、自分の人生をぶつけていった、柳原白蓮、武部りつ、宗像なみ子、山家和子、という４人の女性たちの姿を取りあげている。

第２章『愛を基本に◆社会事業に生きる』では、公的保障がきわめて不十分であった時代に、社会事業に対する出発点を自分に求め、私財を投げうってまでして社会事業にその人生をかけた石井筆子、丸山千代、斉藤百合、長谷川よし子、という４人の女性を取りあげている。

第３章『あふれる思いを◆生涯を女子教育に』では、近代社会が「良妻賢母」という言葉のもとに女性の役割を固定化し画一化した教育内容に対する疑問から、女性が学ぶということを通して、社会に関わり、社会を構成する一員として、それなりの役割を果たすことの重要さを、自らが教育機関を創設し運営することで実現した、十文字こと、羽仁もと子、菅谷きよ、香川綾、赤堀全子、という５人の女性を取りあげている。

カバー及び扉には、豊島区鬼子母神近くに住み、羽仁もと子の主宰する『子供之友』の挿絵画家として数多くの子供の絵を描いている村山知義の作品を用いている。知義は現在、雑司が谷霊園に永眠している。

エポック１０では、「今日の女性に様々な影響をもたらしたこれらの方々の生き方や活動は、歴史的にも、また女性問題を考えるうえにも重要であり、多くの示唆に富んでいると思われます。本書が一人でも多くの方にお読みいただければ幸いです」と話している。

問合せ　豊島区立男女平等推進センター「エポック１０」